随想　持続可能な開発のための幼児期の教育

福祉貢献学部 教授　白石淑江

２０１４年11月10日～12日、名古屋で「持続可能な開発のための教育」（ＥＳＤ）に関するユネスコ世界会議が開催されました。福祉貢献学部では、この大会の幼児教育部門議長を務めたジョン・ブラッチフォード博士（英国Swansea大学 名誉教授）をお迎えし、ＯＭＥＰ（世界幼児教育・保育機構）日本委員会との共催で講演会を開きました。「幼児期におけるＥＳＤの新たな10年間」と題した講演会には、学生のほかに学外から50人を超える参加者がありました。

講演の最初に、博士は「現在の開発が、将来、地球に住む人たちのニーズを阻害するものであってはなりません。将来的に重要な利害関係者となるのは乳幼児世代です。その世代のために地球環境を壊さない開発を進めていかなければなりません。そして、そのための教育は幼児期から始める必要があります。」と述べました。

そして、社会・文化、環境、経済の三つの柱から成るＥＳＤプログラムの基本理念について、事例をあげて説明しました。社会・文化に関しては、伝統的な性別役割意識が根強いケニアのごっこ遊びの取り組みが紹介されました。ノーベル賞を受賞した女性医師をロールモデルとした病院ごっこや、様々な職種のユニフォームを性別にとらわれず自由に身に着けて遊ぶことが、偏見のない平等な社会をめざす教育方法として用いられていました。

環境に関しては、幼児が英国の指導員と一緒にコウモリの保護活動に取り組んだ事例が紹介されました。コウモリの生態を観察し、受粉や蚊を捕るなどの役割を担っていることを理解した幼児たちは、積極的に保護活動に取り組んでいました。

ユネスコのＥＳＤプログラムでは、幼児を有能で活動的な存在と位置づけています。幼児は、保育者の適切な援助で、人間と自然、人間と社会の結びつきに気づき、幼児なりに理解を深め、行動することができるのです。今後は、子ども福祉専攻でも、ＥＳＤプログラムを踏まえた教育内容を充実させたいと思います。